

精神保健福祉相談援助の基盤

問題 21 精神保健福祉士法に関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 法の目的は、精神保健福祉士の資格を定め、その業務の適正化を図ることで精神障害者の社会的復権を目指すことと規定している。
- 2 精神保健福祉士は、資質向上の責務として、相談援助に関する知識及び技能の向上に努めなければならないと規定している。
- 3 精神保健福祉士は、精神障害者やその家族の信用を傷つけ、その人間としての尊厳を侵してはならないと規定している。
- 4 精神保健福祉士が信用失墜行為をした場合、1年以下の懲役又は30万円以下の罰金に処せられると規定している。
- 5 精神保健福祉士は、5年に一度の厚生労働省が定めた研修を受けなければならないと規定している。

問題 22 次の記述のうち、日本精神保健福祉士協会倫理綱領の目的に規定されているものとして、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 他の専門職や全てのソーシャルワーカーと連携する。
- 2 客観的証拠に基づいた実践を展開する。
- 3 専門職としての知識・技術を理解する。
- 4 所属機関と地域社会から信頼を得る。
- 5 福祉と平和に満ちた社会を形成する。

問題 23 福祉専門職の国家資格に関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 精神保健福祉士と社会福祉士は、基盤となるソーシャルワークの理念、倫理、価値において異なる。
- 2 精神保健福祉士、社会福祉士、介護福祉士は、それぞれが福祉の相談援助専門職として異なる法律によって規定された国家資格である。
- 3 社会福祉士は、身体上若しくは精神上の障害があること又は環境上の理由により日常生活を営むのに支障がある者を相談援助の対象としている。
- 4 社会福祉士は、精神保健福祉士と同様に、対象者に主治医がいる場合には、その指導を受けると規定されている。
- 5 社会福祉士は、精神保健福祉士と同様に、日常生活への適応のために必要な訓練を行う、リハビリテーションの専門職としても位置づけられている。

問題 24 ソーシャルワーク理論の代表的な人物とキーワードに関する次の組み合わせのうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 ロビンソン(Robinson, V.) —— 状況の中にある人
- 2 ホリス(Hollis, F.) —— 課題中心アプローチ
- 3 ゴードン(Gordon, W.) —— 4つのP
- 4 ジャーメイン(Germain, C.) —— 問題解決アプローチ
- 5 マイヤー(Meyer, C.) —— エコシステム理論

問題 25 社会的包摂(ソーシャルインクルージョン)に関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 日本精神保健福祉士協会倫理綱領の中で、「倫理基準」の「社会に対する責務」において社会的包摂の実現がうたわれている。
- 2 国連の「精神疾患を有する者の保護及びメンタルヘルスケアの改善のための諸原則」(1991年)で、精神障害者を対象に社会的包摂という用語が初めて用いられた。
- 3 ヴォルフェンスベルガー(Wolfensberger, W.)は、社会的包摂の核になるものとして「ソーシャルロール・パロリゼーション」を提唱した。
- 4 国際ソーシャルワーカー連盟(I F S W)による「ソーシャルワークの定義」(2000年)で、社会的包摂の促進努力がソーシャルワークの価値として強調されている。
- 5 ソロモン(Solomon, B.)は、知的障害者の生活を可能な限り通常的生活状態に近づけることとして社会的包摂を提唱した。

問題 26 精神保健福祉士が行う相談援助に関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 精神保健福祉士は、クライアントの利益を優先に考え、保護的な配慮からクライアントに不利になる情報は伝えず、リスクを回避する。
- 2 パターナリズムは、精神保健福祉士とクライアントの関係においては発生せず、医師と患者の関係において発生するものである。
- 3 精神保健福祉士は、専門職としての権力を持つため、クライアントの権利を侵害する可能性がある。
- 4 長期にわたる入院の場合、クライアントが退院して地域で暮らすことによって、かえってストレスを増大させることになるため、入院継続が望ましい。
- 5 精神保健福祉士は、セルフヘルプグループ活動において、積極的にグループワークの技法を用いて自立を促進させる。

問題 27 医療機関における専門職に関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 看護師は、薬剤の投与や採血、創部の処置などの医療行為については、自身の判断で行うことができる。
- 2 作業療法士は、医師の指示のもとに状態像の評価やリハビリテーションに取り組む、業務独占の国家資格職種である。
- 3 臨床心理士は、医師の指示のもとに心理検査や心理療法を実施する国家資格職種である。
- 4 薬剤師は、医師等の処方箋しょうほうせんに疑わしい点がある場合には、自身の判断で調剤を変更することができる。
- 5 管理栄養士は、傷病者に対する栄養指導並びに施設における給食管理及び施設での栄養改善上の必要な指導等を行う。

問題 28 障害者の権利擁護に関する次の記述のうち、正しいものを2つ選びなさい。

- 1 ソーシャルワークにおけるアドボカシーとは、単なる弁護や代弁ではなく、生活を支援していく上で、幅広く積極的な実践内容を含んでいる。
- 2 ピアアドボカシーとは、クライアント自らが法の遵守を監視し、法の問題点を吟味し指摘する役割をいう。
- 3 合理的配慮とは、障害者が他の者と平等にすべての人権や基本的自由を享有するのに、必要かつ適当な変更や調整のことをいう。
- 4 ブローカーロールとは、ソーシャルワーカーの弁護者としての役割をいう。
- 5 クラスアドボカシーとは、支援者の側からではなく、当事者自らが主張することを支援することをいう。

問題 29 多職種連携の意義に関する次の記述のうち、正しいものを2つ選びなさい。

- 1 様々な専門職の視点を基に、利用者の理解について全人的な把握が可能になる。
- 2 専門職の間で発生する対立・葛藤^{かつとう}を未然に防止することができる。
- 3 利用者の意向確認が省け、専門職による方針決定が迅速になる。
- 4 医学モデルによる治療システムに適しており、医師の指導が徹底できる。
- 5 異なる立場の専門職同士が共に学び合い、専門職として成熟していく機会になる。

(精神保健福祉相談援助の基盤・事例問題 1)

次の事例を読んで、問題 30 から問題 32 までについて答えなさい。

〔事例〕

Aさん(23歳、男性)は、幼いころから友達ができず、大学時代も人に合わせるのがとても苦手で、友達との会話では何を話してよいのか、相手が何を求めているかも分からず、次第に話の輪に入れなくなっていった。

Aさんは、大学を卒業し広告会社に就職したが、職場でのコミュニケーションが上手くいかず、「自分はダメな人間だ」と自分を低く評価して、気分が落ち込んだ状態が続くようになった。しかし、自分ではどうすればよいのか分からず、また誰にも相談せず1人で悩んでいた。このような様子を見てAさんのことを心配したB上司は、会社が契約しているプログラムを利用することを考えた。(問題 30)

B上司の勧めによりプログラムのカウンセリングを利用する中で、Aさんは、自分が発達障害かもしれないと思うようになった。その後、精神科医の診察の結果、アスペルガー症候群という診断を受け障害に関する詳しい説明を聞いて、それまで訳が分からず苦しんでいたことの原因が、障害によるものであると分かりほっとした。そして、プログラムを提供している事業所のC精神保健福祉士に相談するうちに、自分自身が対処する方法を身につけたいと考えるようになった。(問題 31)

相談を受けたC精神保健福祉士は、Aさんが取り組むプログラムに関する相談に乗るだけでなく、他の専門職や機関との支援体制を作るために連携を行った。さらに、Aさんの今後を考え、専門職がかかわるだけではなく、B上司や同僚が職場でできるサポートをAさんに提案して実施することとした。(問題 32)

その後、C精神保健福祉士の支援を受けたAさんは、少しずつではあるが職場で同僚とも世間話ができるようになった。その結果、仕事を辞めることなく継続して働くことができている。

問題 30 次のうち、Aさんが利用できるプログラムとして、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 複合的自殺対策プログラム
- 2 従業員支援プログラム(EAP)
- 3 リワークプログラム
- 4 社会生活力プログラム(SFA)
- 5 包括型地域生活支援プログラム(ACT)

問題 31 次の記述のうち、Aさんに対するC精神保健福祉士の対応として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 コミュニケーション面の課題を指摘して、改善を求める。
- 2 相手に合わせられないことが問題だと伝え、相手に合わせるように指示する。
- 3 B上司の指示を守ることの重要性を伝え、その指示に従うように言う。
- 4 質問や確認の方法を一緒に考え、可能な方法を探す。
- 5 今の会社を辞めて、就労継続支援事業を利用するように勧める。

問題 32 次のうち、そのサポートとして、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 コンサルテーション
- 2 ピアサポート
- 3 ケアマネジメント
- 4 フォーマルケア
- 5 ナチュラルサポート

(精神保健福祉相談援助の基盤・事例問題 2)

次の事例を読んで、問題 33 から問題 35 までについて答えなさい。

[事 例]

Dさん(68歳、男性)は、30歳でうつ病を発病、入院し、それまで勤めていた会社を退職せざるを得なかった。何度か再発しながらもデイケアで知り合った妻と40歳で結婚し、その翌年に妻の兄が経営するコンビニのパート従業員として働き始め、今は病状も落ち着いている。かつて入院していたU病院に2週間に1回の通院を欠かすことなく、毎月の元デイケア利用者の会合(以下「OB会」という。)にも顔を出して、他のメンバーの相談に乗ることも多い。OB会では、E精神保健福祉士がDさんへの対応を主に担っている。

ある日、Dさんの妻からE精神保健福祉士に電話があり、最近、接客でうっかりミスが目立つようになって心配だという。詳しく話を聞くと、半年くらい前から物忘れをするようになり、年相応のことと考えてあまり気にしていなかったという。E精神保健福祉士は、先月のOB会でDさんと他のメンバーとの間で「言った、言わない」の行き違いがあった際に、Dさんと面談したところ、本人も物忘れを気にしていたことを思い出した。主治医の診察により、Dさんは軽度認知障害の疑いがあると指摘された。それを受けて、次の通院日にE精神保健福祉士は、Dさんと妻と今後のことについての話合いの場を持った。(問題 33)

Dさんは、引き続きOB会に参加し、これからもパート従業員として働きたいが、そのことを周囲に理解してもらおう自信はないと述べた。E精神保健福祉士は、Dさんの希望にそいながら日常生活の維持を図るために、日頃から連携の取れている地域包括支援センターなどの関係する専門職間で情報交換を行った。(問題 34)

その結果を受けて、Dさんや他の利用者の双方が安心して過ごせるようにOB会プログラムに配慮を行うことになった。また妻の兄に提案し、コンビニにおいてDさんが仕事を継続できるように取り組んだ。(問題 35)

E精神保健福祉士の働きかけもあって、Dさんの状態も安定しているが、継続的に家庭、OB会やコンビニでのDさんの様子を確認することになっている。

問題 33 次の記述のうち、この話合いでE精神保健福祉士が行った対応として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 Dさんに対して、妻が心配しているほどの状態になっていることについての自覚を促して、事態を放置していたことの反省を求める。
- 2 妻に対して現実をありのまま受け入れ、いずれDさんが寝たきりになる可能性も考慮し、介護技術の習得を求める。
- 3 直後のOB会で、会のメンバーにDさんには軽度認知障害の疑いがあることを伝え、今後Dさんが参加したときのかかわり方をメンバーに助言する。
- 4 Dさんの外来に同行し、Dさんとともに状況をより細かく主治医に説明することを妻に勧める。
- 5 Dさんの自己決定が難しいと判断し、妻と今後の支援方針を立てる。

問題 34 次のうち、この専門職間のネットワークをピンカス(Pincus, A.)とミナハン(Minahan, A.)がいう「4つのシステム」として位置づけた場合、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 アクションシステム
- 2 クライアントシステム
- 3 ターゲットシステム
- 4 ワーカーシステム
- 5 チェンジエージェントシステム

問題 35 次のうち、E精神保健福祉士の取組として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 ユニバーサルデザイン
- 2 アファーマティブアクション
- 3 ソーシャルアクション
- 4 アドボカシー
- 5 行動変容アプローチ